新型コロナ　取り残される「免疫能が低下した人たち」

2022/5/23 谷口恭・太融寺町谷口医院院長 毎日新聞

3年ぶりに開催され、総おどりでフィナーレを迎えた博多どんたく港まつり＝福岡市中央区で2022年5月4日午後7時3分、津村豊和撮影

新型コロナウイルス感染症はすでに終わった、という雰囲気が強くなってきています。日々新聞紙上で発表される感染者数をみていると、「まだまだ新型コロナは終わっていない」と感じられますが、患者さんの言動に注意していると、私の肌感覚としては世の中の多くの人がすでに、新型コロナは過去のものだと認識しています。それは若者だけであり高齢者にとっては依然として恐怖の病なのでは？とみる向きもあるでしょうが、その高齢者も少しずつ変化してきている印象があります。それでもやはり、世の中には新型コロナを恐れる人たちが残ります。さまざまな理由で体の免疫能が弱まり、ワクチン接種を受けても感染を防げない人たちです。今回はその話をしたいと思います。

「悔いはない」と孫を預かった高齢男性

先日、70 代のある男性の患者さんから「娘から頼まれて孫を預かったんです。幼稚園が（新型）コロナ（の感染者が出たせい）で休みやったみたいで……」と言われて驚きました。この男性は胃がんの手術を受けていて、そのときに脾臓（ひぞう）を取っています。脾臓摘出と新型コロナ重症化の直接の関係を調べた研究は見たことがありませんが、一般に脾臓は免疫をつかさどる重要な臓器であり、脾臓摘出者は感染症に対して弱くなります。つまり、70 代で脾臓摘出をしているこの男性は新型コロナの重症化リスクが高いのです。

その男性が、新型コロナで休園となった幼稚園に通うお孫さんを預かるとは……。お孫さんが無症状であったとしても感染の可能性は否定できません。無症状のお孫さんからこの男性に感染して男性は重症化、というリスクを考えなければなりません。しかし、男性は「怖くない」と言います。「あきらかに新型コロナやったら私も考えますけどね。ワクチンは 3 回（の接種を受け）終わっているし、多少のリスクは背負わなければ何もできません。もしも新型コロナに感染して死んだとしても、それが孫からやったら悔いはありません」。そこまで言われるのならばその考えを尊重すべきでしょう。

この男性以外にも、「ある程度の予防をしてそれで感染するのは仕方がない」と考える高齢者が増えてきているような印象があります。たしかに「残りの（短い）人生を悔いがないように生きるには、多少のリスクを抱えても、好きなこと、やりたいことを行う」というのは理にかなった考え方と言えるでしょう。

高齢者などを対象に進む新型コロナウイルスワクチンの3回目の接種＝福岡市早良区のフカガワクリニックで2022年2月1日午前10時6分、徳野仁子撮影

高齢者などを対象に進む新型コロナウイルスワクチンの 3 回目の接種＝福岡市早良区のフカガワクリニックで 2022 年 2 月 1 日午前 10 時 6 分、徳野仁子撮影

「ワクチンが効かなかった」40 代女性

では、年齢が若いハイリスク者はどうでしょうか。太融寺町谷口医院のある患者さんを紹介しましょう（ただし、いつものようにプライバシー保護の観点から詳細にはアレンジを加えています）。

その女性は現在 40 代。10 年前の 30 代半ばに突然手足が動かなくなり「多発性硬化症」という疾患だと診断されました。この疾患は難病指定されている慢性疾患で「自己免疫疾患」とよばれる病気の一つです。本来は外敵から身を守るために働くはずのリンパ球が、自分の神経のさやを攻撃してしまうのです。つまり免疫系に異常がある病気であり、新型コロナ重症化のリスクになり得ます。

このような場合、新型コロナワクチンが強い味方になります。そこで、ワクチン接種を受けたのですが、ひどい副作用に悩まされて 1 週間寝込み、その後も倦怠（けんたい）感が 2 カ月以上にわたり続きました。しかも、それだけ苦労してワクチン接種を受けたのにもかかわらず、3 カ月後に抗体価（新型コロナウイルスに対する抗体の量）を調べるとかなり低い値になっていました。

結局この女性は、ワクチンの副作用と後遺症にかなり苦しめられたにもかかわらず、有

効な抗体が形成されなかった、または、いったんは形成されたものの有効性が維持できなかった、ということになります。では、この女性は副作用を覚悟して 2 回、3 回、あるいは 4 回（さらに 5 回）とワクチンを受けるべきなのでしょうか。

4 回の接種でも抗体ができない

ここで英紙「Financial Times」が掲載した、免疫能が低下している人に関する興味深い記事を紹介しましょう。

この記事にも多発性硬化症の女性が登場します。この女性はワクチン接種を 4 回受けたものの、効果が不十分であり、5 回目のワクチン接種を受けたそうです。英国では、免疫系に異常がある国民は、5 回目の接種が受けられます。では、どれくらいの人が 4 回の接種を受けても免疫がつかないのでしょう。これについて記事は、「腎移植を受けた 239 人のなかで 4 回接種の後でも、抗体が形成されなかった人が約 2 割いた」という、英インペリアル・カレッジ・ロンドンの研究者たちによる調査結果を紹介しています。なお、腎移植を受けた人は、移植された腎臓を自分の免疫が攻撃して破壊するのを防ぐために、通常は免疫抑制剤を飲み続けています。

4 回の接種で抗体が形成されなければ、5 回目の接種が受けられるのは「免疫能が低下している人」にとっては確かによい制度です。さらに英国では、こういった人たちは新型コロナの検査も無料で受けることができ（英国ではこれまでは誰もが無料でしたが今後有料になっていくようです）、検査結果が陽性の場合は新型コロナの特効薬を無料で処方してもらえます。これらも、免疫能が低下している人たちにとってはありがたい制度ではあります。英国の行政はすべきことをやっている、と言えるかもしれません。

では、免疫能が低下している人たちは国に感謝し喜んでいるのかというとそういうわけではありません。Financial Times の取材に対し、多発性硬化症の女性は「I do feel a bit resentful（私は少し腹を立てています）」と答えています。臓器移植を受けている別の女性は「completely on hold（私の人生は完全に保留されたまま）」と述べています。

では、免疫能が低下している人たちは、誰に対して腹を立て、誰のせいで人生を保留にされているのかというと「世間の人たち」です。

新型コロナは過去のもの？

英国当局の報告から Financial Times が解析したデータによると、同国ではなんと国民の 9 割がすでに一度は新型コロナに感染しています。感染者の半数は昨年末以降、オミクロン株が流行した際に感染したとみられます。これを書いている 5 月半ばの時点でも英国では 1 日 1 万人程度の新規感染者が出ていますが、国民の意識は「すでに新型コロナは過去のもの」とみなしているようです。

潮干狩りを楽しむ大勢の人たち＝千葉県富津市で2022年5月4日、西夏生撮影

Financial Times が関与した世論調査では、「新型コロナに感染したときに免疫能が低下している人との接触を避けるべきだ」と答えた人はわずか 55%。半数近くの人は「自分が新型コロナにかかっても他人を気遣う必要がない」と考えているわけです。「新型コロナに感染すれば自宅で仕事をすべきだ（外出すべきでない）」と答えたのは 63%だけです。世間の認識がこういう状態であれば、免疫能が低下している人たちは外出するのも恐怖を覚えることになります。

免疫異常の患者や透析患者らの苦労

ここで、先ほどから繰り返している「免疫能が低下している人」を詳しくみていき、そして日本での状況も考えてみましょう。免疫能が低下している人を三つに分けると、(1)多発性硬化症、膠原（こうげん）病など免疫能を低下させる疾患に罹患（りかん）した人 (2)免疫を抑制する薬（抗がん剤や免疫抑制剤など）を使っている人 (3)人工透析を受けている人――です。新型コロナの重症化リスクを高める要因ということで言えば、肥満、喫煙、高血圧・糖尿病などの生活習慣病などもありますが、リスクの大きさで言えば、やはり免疫能が低下するこれら三つのカテゴリーに入る人のリスクが高いのです。

病室で透析を受ける患者たち＝前橋市青梨子町のさるきクリニックで2020年3月6日午前10時28分、滝川大貴撮影

ところで、新型コロナに対する知識がある人は、自身が新型コロナかもしれないと考えれば高齢者には近づかないようにします。（日本では）大勢の人が当分の間この習慣を続けるでしょう。では、免疫能が低下している人に対してはどうでしょうか。例えば、人工透析を受けている同僚に対しては注意することになるでしょう。では、たまたま電車で横に立った、人工透析を受けている人に対してはどうでしょうか。

もちろん、電車内で近くに立っただけでは、その人が人工透析を受けていることは分かりません。また、車内で隣に立った人が免疫抑制作用のある薬を飲んでいるかどうか、あるいは多発性硬化症などの免疫を低下させる疾患にかかっているかどうかなど分かるはずがありません。もしもあなたが電車のなかで少し頭痛がするなと感じたときに、高齢者からは離れることができたとしても、免疫能が低下した若者がどこにいるかを知るすべはないのです。

かといって、周囲のすべての人が免疫能が低下していると考えて行動をすることもできません。それをしようと思えば、ロックダウンや緊急事態宣言を延々と続けなければならなくなるからです。ということは、結局のところ、免疫能が低下している人たちの方から、世間からの距離を取るしかないことになります。実際、先述した英国の多発性硬化症の女性は経営していた美容院を閉めたそうです。

新型コロナが軽症化し、会食やパーティーが再開できるようになり、海外にも行けるようになったことは歓迎すべきです。ですが、世の中がそういった歓迎ムードになればなるほど、免疫能が低下した人たちはこれまで以上に社会から隔離されていくのです。